朝日新聞　２０１９年１０月２９日　朝刊　１ページ　東京本社

天声人語

映画やドラマ、舞台の世界に生きて70年余、八千草薫さんが亡くなった。『源氏物語』『三四郎』『雪国』『放浪記』『細雪』『不毛地帯』。数多くの出演作を並べると、さながら文学史をたどるようである▼大阪市の出身。2歳で父と死別する。14歳だった終戦1週間前の夏、空襲で自宅が焼け落ちるのを見た。大切にしていた人形が炎にまかれ、「まるで自分が焼けていくような気持ちでした」。のちに随想に記した▼引っ込み思案で人見知り。それなのに俳優を志したのは、戦争中の殺伐とした暗鬱な世界とは違う「キラキラとした色のある世界に対する飢えがあったから」。あこがれの宝塚の門をたたく▼与えられた役は多種多彩。時代劇の姫君でも、夫を殺された妻でも、この人が演じると清楚さと芯の強さがにじんだ。鍛錬のたまものではあろうが、常にどこか天性の品のよさを感じさせた▼忙しい俳優業のかたわら、自然保護活動にも力をそそぐ。環境庁（いまの環境省）から要請され、自然環境保全審議会の委員も務めた。映画監督だった夫の故・谷口千吉さんと内外の山に登り、自宅では犬や猫を愛した。「オオカミを飼うのがかなわぬ夢」などとしばしば語っている▼「あの役を演じたい、この作品に出たいという欲はまったくありません。俳優が自分に向いているのかとずっと疑問でした」。今夏刊行した随想『まあまあふうふう。』にそんな独白がある。無欲さがあの自然で無垢な演技を生んだような気がする。

2019・10・29

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。